

分科会③「きいてみよう☆語り合おう～女子が理工系で働くこと～」

現役の女性研究者・技術者の方に、学生時代の過ごし方や就職活動、会社での仕事の様子、結婚や子育てを含めた様々なお話をうかがい、理工系分野に進む女性を応援するために何が求められるのか、話し合いました。

●コーディネーター

広石 拓司さん（株式会社 エンパブリック 代表取締役）

●理工系で働く女性

梅田 朋子さん（滋賀医科大学外科学講座（乳腺・一般）特任講師）

今村 綾さん（長浜バイオ大学バイオサイエンス学部 講師）

小島 弓佳さん（NTT西日本ー中国 設備部 エンジニアリング部門）

（梅田さん）

- ・ 学生のころ、国語が苦手だったので何となく理科系に進んだ。
- ・ 医学部に進んでから、「倒れている人を助けたい」、「何でもできる人になりたい」という思いで外科を選択。とにかく一生懸命勉強して専門医をめざした。
- ・ 結婚前は月の3分の1が当直で、病院の椅子で寝る生活をしてきた。ずっと結婚・出産をしない人生を歩むと思っていたが、イギリスに留学したら家族で留学している人がほとんどであり、「家族は大切、子どもは可愛い」と思うようになった。帰国後すぐにパートナーと出会い、結婚・出産。3人の子どもに恵まれる。
- ・ 一時は専業主婦をしていたこともあるが、専門医認定の更新が切れる直前になって、「今まで一生懸命やってきたことが役に立たなくなる」、「キャリアを維持したい」と考え、再度、病院に戻ることを決意。両親、家族の協力があり、今こうして続けられている。



（今村さん）

- ・ 高校生の頃は数学と物理が苦手なだけでなく「動物が好きなので獣医になりたい」という思いで理科系を選択。当時、理科系は7クラスで、その半分は医学部

を目指していた。高校の友だちから「刺激と助言」を受け、みんなの姿をみて努力した。

- ・ 母は教師で、「女性はずっと働き続けるのが良い」、「手に職をつけるのが良い」と言われていた。母の存在の影響は大きいと思う。
- ・ 遺伝子を研究して6～7年が経過し、今は生活の大半を大学で過ごしている（約12時間）。



研究は、ひとつの結果が出るのに数か月かかるため、そのスパンとのつきあいの連続。予想→仮定→検証を経て、説明のつかない結果が時として出てくる。予測の立たない生物現象の魅力が、研究を続けられる理由だと思う。

- ・ これまで、結婚するタイミングがなかったが、家庭を持ちたいし、女性として出産をする方が良いと思っている。

(小島さん)

- ・ 幼稚園の頃から働く女性に憧れていた。理科が好きになったのは、小学校での理科の実験の授業。
- ・ 高校生では数学が苦手になり、理科系に進むことをあきらめようかと父に相談。父から「困難な道ほど、明るい未来が待っている」に言われ、理科系に進むことを決意。



高校は女子校で、理科系に進む人は6～7人。大学では女性は1割だった。

- ・ 職場では、初めて女性が配属された部署で、自分は男性の中に入り込むのに抵抗はなかったが、研修講師や上司の方が戸惑われていた。
- ・ 今の会社を選択したのは福利厚生が充実していること。制度はあっても、取得実績がなければ意味がないので、下見やホームページの情報で確認して選択した。
- ・ 毎日楽しく充実して過ごせるのは、高校生の時の父親の言葉と、家を出て就職することを認めてくれた母と会社の理解と先輩方のおかげである。

(ディスカッション)

広石さん：結婚して今の仕事に生かしていることは？

梅田さん：母親の気持ちがわかるようになった。「乳腺」のしくみも、子どもを授かって身をもって体験できた。患者の気持ちがより理解できるようになったのはプラスである。

広石さん：ロールモデルがおられたか？

今村さん：大学の農学部は男女半々（工学部は1割）で、研究職に入ってから、教授は男性であったがドクターには女性が3人おられた。それを見て自分も挑戦しようと思った。自分の周りにはロールモデルが多い。

小島さん：女性として採用されたのは自分たちの年代が初めてなので、ロールモデルはいない。例えば、一企業ではロールモデルがいなくても、他社のロールモデルをつなぐとか、制度の利用状況などの公開をしてみようか。



（質疑応答）

質問：滋賀の教育現場における進路選択時の助言について、小5～6年の職業教育で何が必要か教えてほしい。

回答：共働きで協力している家庭や育児をしている男性など、「男女でいっしょにやる」というコンセプトを見せる。（梅田さん）

女性は欲張りでいろんなことに興味を持っている。だからこそ、小中高の時に魅力的な働き方をしているロールモデルと出会うきっかけをどんどん与えることが大切。（今村さん）

プラス思考の教育や他のことで活躍している人と話すこと。今日の機会のようなものがあれば「私ももっと頑張ろう！」という気持ちになれる。（小島さん）